



市看×いちかん ちいき通信 2017年 春号 2017年3月10日 発行

いちかん…神戸市看護大学の略称「市看」
「(い)っしょに (ち)いきづくりについて (かん)がえる」をコンセプトにしています。

今号の内容



- P1 ・ロゼトの奇跡
・COCコラボ教育ピックアップ
- P2～3 COCフォーラム
・地域の顔
(教育ボランティア交流会)
・地域づくり・健康づくり
(就職説明会・訪問看護師
として働くこと)
・コラボ教育での学び
(ヘルスプロモーション論)
・COC研究ひろば第8回
(地域連携教育・研究センター
石井久仁子)
- P4 活動予定

ロゼトの奇跡

健康科学分野 准教授 加藤憲司

私は疫学という学問を専門としています。疫学とは、主に病気の原因を解明することを目的とする学問です。その疫学界隈で、昔から伝説のように語られている逸話があります。

1950年代、米国ペンシルベニア州にある人口1000人ほどのロゼトという町に、疫学者らの注目が集まっていました。なぜかと言うと、この町の住民の心筋梗塞の発症率が、同じような生活様式を持つ周囲の町と比べて、半分以下と大幅に低かったからでした。他の病気も同様に少なく、老衰が死因の第一位だったのです。この事実は「ロゼトの奇跡」と名付けられ、研究者らがその理由を探ろうと熱心に研究しました。

その結果、研究者らは次のような結論に達しました。このロゼトの住民は19世紀末にイタリアから移民してきた人々であり、周囲の他の町と

比べて住民どうしの共同体意識が強く、お互いに親密なコミュニケーションがありました。そのため、「何かあっても誰かが助けてくれる」という連帯感が人々に安心感を与え、結果として健康にも良い効果があったのだ、というのがその結論です。

ところが、1960年代に入ると住民たちの世代が変わり、共同体意識が薄れていきました。その結果、心臓疾患などの発症率は周囲の町と差がなくなってしまいました。連帯感が失われることで、健康までもが損なわれてしまったのです。それでもこの歴史的な事実は、人と人とのつながり・結び付きがいかに大切かを示す貴重なエピソードとして、現在も語り継がれています。日本は長寿の国として知られていますが、そこにも「ロゼトの奇跡」と同じような秘密が隠されているのかもしれない。

COCコラボ教育ピックアップ ～2016年秋から冬「基礎看護技術演習I学外演習」～

コラボ教育では、地域住民の生活拠点に出向き、住民の皆様との交流を通して地域の暮らしや人にとっての生活や健康の意味について学びを重ねています。基礎看護技術演習Iでは、「人にとっての睡眠、生体リズム」について、1年生と地域住民と一緒に講義を聴き、小グループに分かれてディスカッションを行いました。学生は、講義と住民の皆様との意見交換を通し、「生活リズム」「睡眠の質」「健康や生活に対する考え方」などについての個別性や多様性に気づき、感想として「看護をするにあたり、自分の当たり前を押し付けず、一人一人に合ったケアをしていく必要があるとあらためて感じた」と意見が出ました。住民参加者からは「睡眠について認識を新たにした。今後の生活に参考にしたい」「若い世代の考え方や思いに少しではあっても直に触れることができ楽しかった」となどの感想をいただきました。

(神戸市看護大学 地域連携教育・研究センター 助教 石井久仁子)